

生命尊重のための教育としての動物介在教育(AAE) に求められる要望と期待-保護者および獣医師、教 員および教職志望学生を対象とした聴き取り調査の 分析から

著者	今野 洋子, 佐藤 満雄, 舟橋 彰子
雑誌名	人間福祉研究
巻	15
ページ	23-36
発行年	2012
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000263/

生命尊重のための教育としての動物介在教育 (AAE) に求められる要望と期待
－保護者および獣医師、教員および教職志望学生を対象とした聴き取り調査の分析から－

今 野 洋 子

佐 藤 満 雄

舟 橋 彰 子

生命尊重のための教育としての動物介在教育（AAE）に求められる要望と期待 －保護者および獣医師、教員および教職志望学生を対象とした聴き取り調査の分析から－

今 野 洋 子* 佐 藤 満 雄*** 舟 橋 彰 子***

抄 録

現在、子どもの心を育てる教育として、動物介在教育（AAE）が注目されている。

本研究では、保護者および獣医師を対象に実施した聞き取り調査から、動物飼育や動物愛愛護教室などの動物介在教育（AAE）への要望や期待について分析した。

その結果、以下の諸点をとらえることができた。

1. 保護者・獣医師・教員・教職志望学生のいずれも、動物介在教育に対する関心は高く、動物介在教育に対する期待も大きかった。保護者も獣医師も動物介在教育に積極的に関わりたいと考えていた。
2. 獣医師による保育園・幼稚園・小学校等における動物愛愛護教室の開催については、保護者・教員・教職志望学生の興味関心が高く獣医師は動物の適正飼養にもつながると考えていた。獣医師は、動物愛愛護教室などを活用し、保護者に対するアプローチも積極的にしたいと望んでおり、保育園・幼稚園や学校の行事の折などを活用したいという要望があった。

活発な開催のためにも、愛玩動物飼養管理士などと協働することが必要であること

が示された。

3. 四者から、モデルプログラムに関しては高い評価が得られたことから、動物介在教育の内容や配列を明確に示すことが、動物介在教育の推進や充実につながる事が考えられた。
4. 教員も保護者も、動物介在教育を学校の教員のみが行うことの難しさを理解しており、学校と獣医師等の専門家との協力体制の確立や協働が必要であること示唆された。
5. 獣医師の適正飼養に関する活動により、現代の動物に関する問題は、動物飼育の問題だけに限られることなく、地域社会の問題、人間関係の問題であることが示唆された。

今後は、保育園・幼稚園・小学校等と保護者・獣医師などの専門家との協力体制を確立し、子どもの心の教育や生命の教育のための動物介在教育（AAE）を推進することが望まれる。

I. はじめに

現在、心を育てる教育の必要性が叫ばれる中、世界的に有効なアプローチの一つとして注目されているのが、動物介在教育（AAE：Animal Assisted Education）である。

*北翔大学人間福祉学部福祉心理学科 ***北方圏学術情報センター研究員

キーワード：生命尊重、動物介在教育、獣医師、保護者

1995年の「人と動物の相互作用国際学会（I A H A I O : International Conference on Human-Animal Interactions Organizations）：開催地ジュネーブ」において、動物介在教育（A A E）は、5つの決議文のひとつとして「学校の授業にコンパニオン・アニマル（仲間、伴侶としての動物）に関する教育を取り入れ、正しい動物とのふれあい方を通じて、子供たちの心の成長に欠かすことのできない動物の大切さを児童教育に活かす」¹⁾ことが採択され、政府や関係各機関への働きかけが行われるようになった。

2001年の「人と動物の相互作用国際学会（I A H A I O）、開催地：リオデジャネイロ」において、「動物介在教育（A A E）は「学校において動物と接する活動」と定義された。主に、獣医師やボランティアなどで構成されるチームが小中学校へ動物を連れて訪問することを通して、子ども達に動物とのふれあいを推奨し愛護精神を培う教育と、学校での動物飼育とを総称したものである。

また、同学会において、「動物介在教育実施ガイドライン」が宣言された¹⁾が、近年、コンパニオンアニマルとの関わりが子どもたちにより影響をもたらすことが明らかになったことに伴い、適切で安全なコンパニオンアニマルに対する接し方や、種類によって異なるコンパニオンアニマルの正しい飼い方を教えることが重要となったためである。また、コンパニオンアニマルを活用した学校におけるプログラムが、子どもたちの道徳的、精神的、人格的な成長を促し、学校を中心とするコミュニティに社会的な恩恵をもたらすことが認められてきたことも関連している。これらを踏まえつつ、学校カリキュラムのさまざ

まな場面に動物を介する¹⁾ことで、動物介在教育の学習機会が増加することが望まれる。

2007年10月、東京で開催された「人と動物の相互作用国際学会（I A H A I O）」でも、動物介在教育の重要性については9つの基調講演のひとつとして発表され、一般演題等でも子どもたちを対象とした教育や活動の効果について報告²⁾された。

一方、これまでの学校における動物介在教育（A A E）に関する研究は、全国の小学校を対象とした「生命尊重の態度育成に関わる生物教材の構成と評価に関する調査研究」³⁾、兵庫県内の小学校の教師を対象とした「学校飼育を通して児童が学ぶもの—ヒトと動物の多様な関係を認識することの重要性—」⁴⁾、広島県内の幼稚園を対象とした「幼稚園における動物飼育の現状と動物介在教育の可能性」⁵⁾等があり、動物介在教育で重要な位置を占める動物飼育の目的や課題が示された。しかし、保護者や獣医師など、学校教育と連携すべき対象者による動物介在教育（A A E）への要望や期待等を捉えた研究はほとんど行われてこなかった。

そこで、動物介在教育の国際的・国内的動向を踏まえ、本研究では保護者や獣医師および愛玩動物管理士の、動物介在教育（A A E）への要望や期待を把握し、課題を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ. 対象および方法

保護者の「動物介在教育に対する要望や期待がいかなるものか」を引き出すため、質的研究であるグレイザー（1967）のグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach）⁶⁾を採用した。グラウンデッ

ド・セオリー・アプローチには幾つかのバージョンがあるが、中でも最もデータに密着して分析する本来の「データ対話型理論」⁷⁾であるグレイザー（1967）のグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いることにした。

データ収集に関しては、保護者については、2011年4月～2011年7月、北海道内の小学校児童の保護者を対象とした研修会において、調査への協力を依頼し、本研究に対する理解と同意を得られた北海道A市の保護者12名（年齢31～42歳、男性4名・女性8名）に、2011年6月～9月の間に、個別に聴き取り調査を実施した。

獣医師に関しては、幼児児童生徒対象の動物介在教育に関わりのある獣医師を対象として、調査への協力を依頼し、本研究に対する理解と同意を得られた北海道・神奈川県・東京都の獣医師14名（年齢30～58歳、男性12名・女性2名、うち動物介在教育に関して研修を受けた教員は2名）に、2010年10月～2011年9月、個別に聴き取り調査を実施した。

教員については、2011年4月～2011年7月、小学校教員を対象とした研修会において、調査への協力を依頼し、本研究に対する理解と同意を得られた北海道および神奈川県の教員18名（年齢31～58歳、男性10名・女性8名）に、2011年6月～10月の間に、個別に聴き取り調査を実施した。教員志望学生については、北海道および愛知県の学生12名（年齢19～21歳、男性6名・女性6名、うち動物愛護に関するボランティアを実施している学生4名・動物愛護ボランティア経験のない学生6名）に聞き取り調査を実施した。

聴き取り調査場所は、各対象者と相談の上、決定した。一人当たり1回実施し、逐語録に

まとめ分析した。

1回の聴き取り調査時間は50分～120分程度であり、できるだけ自由に語ってもらうことを基本として行った。ただし、聴き取り調査に関する了解を得るため、事前に筆者らが作成した動物介在教育のモデルプログラム（図1、図2、表1および資料1を参照）とインタビューガイド（質問項目）を送付した。

インタビューガイドの項目は、①動物介在教育についてどう考えるか ②動物介在教育による子どもの変化とはどのようなものか ③動物介在教育の困難点は何かとし、これらについて自由に述べることとした。なお、これらの項目は、「生命尊重の態度育成に関わる生物教材の構成と評価に関する調査研究」³⁾「学校飼育を通して児童が学ぶもの—ヒトと動物の多様な関係を認識することの重要性—」⁴⁾「幼稚園における動物飼育の現状と動物介在教育の可能性」⁵⁾を参照したものである。

聴き取り調査の内容をICレコーダで記録し、逐語録にまとめ、グレイザー（1965）による継続的比較分析（Constant Comparative Analysis）⁸⁾を行った。継続的比較分析では、収集された逐語録データについて、オープンコーディングとしており、分析過程の中で、理論的メモコーディングを行い、継続する中で浮上した核概念について、選択的コーディングを行う。グレイザーは「メモが無ければ、理論的構想の種別、並べ替えも、統合性のある執筆も不可能であろう」⁹⁾としており、分析過程の中で、理論的メモ（theoretical memoing）の作成も併せて行った。

倫理的配慮については、調査対象者から文書で調査協力の同意を得るとともに、個人や地域等の関係することがらが特定されること

が無いようデータについて加工すること等、誓約書を以て約束した。

逐語録作成後は、I Cレコーダの記録を消去し、逐語録データの管理は留意して取り扱った。

以下、本稿では、データは「」、コードは【】、核概念を[]、生成された理論を〈〉で示すこととする。

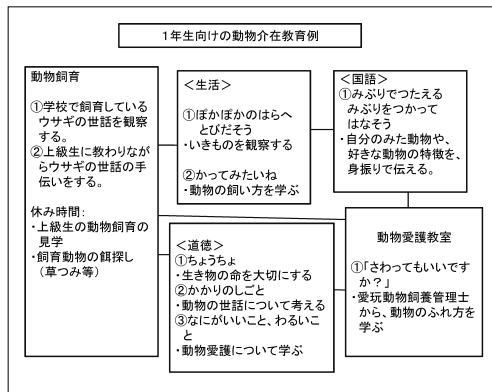


図1 1年生の学習

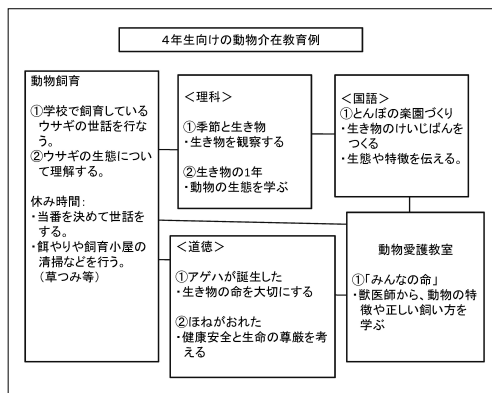


図2 4年生の学習

表1 動物愛護教室の内容（例）

学年	指導者	学習テーマ	主な学習内容
1年	愛玩動物飼養管理士	さわってもいいですか	<ul style="list-style-type: none"> 動物との事故を避けるため、むやみに動物に触ってはいけないこと、乱暴にさわらないことを学ぶ。 散歩中の犬に触りたいとき、必ず飼い主に「触ってもいいですか」と断る。 動物にさわったあとは、必ず手を洗う。
2年	動物園の職員	いろいろな動物	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな動物の種類があり、動物によって育つ環境や世話の仕方が異なることを学ぶ。 動物園にはどんな動物がいるのか、動物園にいる動物の特徴や、もともとどんな地域に住んで、どんな暮らし方をしているか、どんなものを食べるかを知る。 動物園でのマナーを学ぶ。
3年	獣医師	動物の赤ちゃん	<ul style="list-style-type: none"> 動物の赤ちゃんが動物のおかあさんの世話を得て、一生懸命生きる様子を知り、命の大切さを学ぶ。 生まれたばかりの赤ちゃんの姿を知り、動物のおかあさんが赤ちゃんを必死に守り育てる様子を学ぶ。
4年	獣医師	みんなの命	<ul style="list-style-type: none"> 人間も動物も同じような器官を持っており、人間も動物も命ある大切な存在であることを学ぶ。 人間と動物の心臓の音を聴き比べるなど、体験的に学び、同じ仲間であることを実感する。
5年	愛玩動物飼養管理士	ポチを送る	<ul style="list-style-type: none"> 動物の死に際し、どうすればよいかを考える。 「ポチを送る（小さいころからいっしょに暮らしてきた犬のポチが亡くなり、悲しみ、弔う子どもの話）」という物語を読み、考えを発表する。 身近なものの死をどう受け止めるかを考える。
6年	動物管理センター職員	ほく・わたしと動物が生きる社会	<ul style="list-style-type: none"> 自治体の動物保護センターに収容される動物の実態について知り、自分たちにできることを考える。 動物を飼うときの心構え・責任感を持つ。

資料1 全校集会例

全校集会（動物愛護集会）案

1. テーマ：「迷子にしないで」
2. 日時：9月19日（金） 3・4校時
3. 指導者：愛玩動物飼養管理士〇〇先生・全教員
4. 場所：体育館（イスを持って並ぶ）
5. テーマ設定の理由：本校の子どもたちの家の約3分の2以上で動物を飼っている。飼育動物の安全を守るのは、飼い主の責任である。大切な家族の一員を危険にさらさないような対策を理解させ、どのような対策をとることができるかを考えさせる。
6. 展開

	児童の活動	留意点
導入	<p>●校長先生のあいさつ 愛玩動物飼養管理師からの説明を聞く ○「全国の自治体に収容される犬・猫は毎年約42万頭です。収容された動物にも飼い主がいたはずです。」 「かわいそう」 「捨てられたのかな」 「迷子になったんだ」 ○「迷子になることも、大きな要因のひとつです。」</p>	<p>パワーポイントでの資料提示</p>
	<p>飼育動物を迷子にさせないためにどうすればいいのかを考える。 ◇グループで考えたアイデアをカードに書き出す。 「首輪をつける」 「名前を書いた迷子札をつける」 「逃げ出さないように気をつける」 「うちの犬みたいに鎖につなぐ」 「外に出さない」 「かごに入れて運ぶ」 ◇考えたアイデアを掲示板に貼る ◇愛玩動物飼養管理士から、迷子にさせないための方法について話を聞き、自分たちのアイデアを整理する。 ◎休み時間を10分とる ○「飼っている動物がいなくなったらどうしたらいいのでしょうか」 ◇いなくなったらすぐに探す。探さないのは殺すのと同じである。問合せ先や探すための具体的な方法を知る。 ○「もし、迷子かなと思う動物を見たらどうしたらいいのでしょうか」 ◇クイズをしながら学ぶ。 まず、保護する。 保護した動物の種類は？ 首輪はしている？ … ○「明らかに捨てられたという場合は、必ず警察に連絡しましょう。動物を捨てることは犯罪です」</p>	<p>縦割りでの学習班で考える 6年生がリーダーシップをとる</p> <p>同じアイデアは重ねて貼る</p> <p>パワーポイントで資料を提示 チャート式のクイズを用いる</p>
まとめ	<p>◇今日の集会の感想を用紙に記入する 「迷子にしてはいけない」 「迷子にならないよう気をつける」 「動物を捨てることは悪いこと」 「大事に飼いたい」</p>	

Ⅲ. 結 果

1. 動物介在教育についてどう考えるか

保護者は、動物介在教育について「命の大切さを知る機会になる」「動物の世話をすることで責任感が身につく」「思いやりの気持ちを育てることになる」という【命の尊さ】【責任感】【思いやり】等を醸成する上で「有意義な教育」であると考えていた。

動物飼育については「動物をかわいがるようになる」「生き物を大切にできるようになる」ことを通して、「感受性が豊かになる」「心が豊かになる」「心が穏やかになる」「心がいやされる」等の【豊かな情操】や【心の安定】が保たれることに期待が寄せられた。また、借家住まいや転勤などの保護者の仕事の関係から、動物を「家では飼えないので、学校で動物を世話できることは【貴重な体験】」と捉えており、「動物介在教育は必要」という考えがみられた。

「動物愛護教室のような活動」については、「保育園で開催された」「幼稚園で開催された」「小学校低学年で開催された」ことがあった。子どもたちは「前からその日を楽しみにしていた」「うれしそうにということがあったか話してくれた」ことから、「動物愛護教室のような活動」は「子どもにとって有意義な活動」と考えていることが示された。また、動物愛護教室において学んだこととして、

【命の尊さ】【犬や猫などの飼い方】【責任感】【動物の生態】【動物の触れ方】【動物にしてはいけないこと】がわかったことが挙げられた。また、保護者も「動物愛護教室のような活動」では「親の自分が知らないことも多く、自分も一緒に勉強したい」「子どもたちが楽

しそうなので、一緒に体験したい」等、「保護者も積極的に関わりたい活動」であることが示された。

一方、獣医師は、動物介在教育について、保護者と同様に、「命の大切さを知る」「動物への正しい関わり方を知る」「思いやりの気持ちを育てる」という【命の尊さ】【責任感】【思いやり】等を醸成する上で「有意義な教育」であると考えていた。

動物飼育についても、「動物をかわいがるようになる」「生き物の世話を通し、命の大切さを実感する」ことから、【豊かな情操】や【心の安定】が図られることを、【動物介在教育に関わる中で実感】していた。動物の病気や、飼育の課題については、「専門なので協力したい」「適切な病気や死の対応が命の大切さを学ぶことにつながる」ことを指摘した。

「動物愛護教室」については、「保育園・幼稚園・小学校で実施した。」当日の子どもたちの「目を輝かせて楽しそうな様子」だけでなく、「散歩途中の犬の飼い主に動物愛護教室で学んだマナーを実行していると聞いた」ことや「家のペットに対する態度が変化した」ことなど、子どもが学んだことを実行しており、動物愛護教室が【効果の大きい教育方法】であることが示された。しかし、動物愛護教室の開催数は決して十分とはいえず、もっと開催数を増やしたいこと、

「活発な開催のためにも、愛玩動物飼養管理士などと協働することが必要」と意見が得られた。

また、獣医師は「保護者にも動物愛護教室に参加してほしい」「保護者も参加できるような行事での開催をしたい」と考えており、

「保護者が参加することで適正飼育が理解される」ことや「命の大切さを親子で実感できる」ことに期待していた。

教員の考えについても、「生命尊重のための教育として、動物介在教育は有意義である」こと「子どもの心を育てるために動物介在教育は有効である」ことが得られた。しかし、動物飼育などは一生懸命世話をしても動物は病気になったり、死んだりすることがあり、「命あるものを扱うのは大変」という声が聞かれた。

動物愛護教室については「専門家による優れた授業」であること、「子どもの記憶にも残り、態度の変容につながるもの」であることが認められた。しかし、全校的に取り組むにはアレルギーの子どもの問題などもあることが指摘された。

教員志望の学生からは、「命の尊さを知る上で必要な教育だと思う」「小さいきとから学ぶことが必要」という意見が得られた。特に動物愛護ボランティア経験のある学生からは、「机上の学問では学べないことであり、貴重なことである」ことが示された。

保護者・獣医師・教員・教員志望学生のいずれからも、モデルプログラムについては、高い評価を得ることができた。教員からは「他教科とのつながりがわかり、無理なく動物介在教育を進めることができる」「系統的なので低学年から高学年にかけて学びを深めることができる」という考えが示された。獣医師については「自分たちの役割が明確である」「何について教えればよいかわかる」「何を協力すればよいかわかる」ということが評価された。

保護者からは「どの子どももおなじように

学ぶことができる」「必ず動物介在教育について学ぶことができる」ことが評価の観点となった。教職志望学生からは、「基本が何かがよくわかる」「他の授業でどう展開すればよいかわかりやすい」「1年から6年までの流れがよくわかる」などの教員と同様の意見が得られた。

2 動物介在教育による子どもの変化等

保護者と教員から、動物介在教育による子どもの変化について、いろいろな「動物に興味をもつようになった」、「よく動物のしぐさや様子を観察するようになった」など、【動物への興味関心】が喚起されたことがわかった。また、家で飼っている動物に自分で餌をやる、排泄物の後始末をするなど「動物の世話をよくするようになった」「動物の世話を喜んでするようになった」など【動物の世話】に自主的、積極的に関わるようになったことが把握できた。

また、保護者からは、家庭のペットに関して「○○ちゃん（ペットの名前）がお散歩に行きたいと言っているみたい」「おなかがすいているみたい」など、「生き物の気持ちを考えるようになった」ことが変化として挙げられた。動物だけでなく「人の気持ちを慮るようになった」「きょうだいの気持ちを忖度できるようになった」「友達の心を察するようになった」など【思いやり】の気持ちが育ったことや「感受性が豊かになった」ということも変化としてあげられた。一方、「よく泣いたり怒ったりしていた」が、ペットに話しかけたり、抱っこしたりすることで「心安らぐようになった」「情緒が安定するようになった」ことも変化としてあげられた。

なお、保護者自身が動物飼育に携わった経験から、反抗期の子どもに対する対応についても「動物がいることで心が穏やかになる」など【心の安定】が図れること、子どもや家族に言いたいことを動物に話しかけることによって「自分の【心の慰め】になる」ことを体験的に理解していることが把握できた。あるいは家庭にペットがいることで、家族の【潤滑剤のような働き】を果たし、家族間の人間関係が円滑にいくことから、「子ども同士の人間関係にもよい効果をもたらす」という考えもみられた。

教職志望学生からは、「子どものころからの学びが大事」「子どものときに学んだことは印象深い」ことから「子どものよい変化というより、子どもの成長により影響を及ぼす」という意見が得られた。また、学生自身の動物との関わりから、「知識だけでなく活動することが重要」という考えが得られた。

獣医師からは、前項で述べたように「散歩途中の犬の飼い主に動物愛護教室で学んだマナーを実行していると聞いた」ことや「家のペットに対する態度が変化した」ことなど、子どもが学んだことを実践的に活用していることが示された。

獣医師の経験から、「子どものころからの動物介在教育による学びが、おとなになったときの命の大切さに向き合う態度の基本になり、動物の適正飼育につながる」ことを理解していた。

3. 動物介在教育の困難点

教員および保護者からは、動物介在教育の困難点については、「動物が死亡した時に困る」「動物が原因で子どもが感染したら困る」

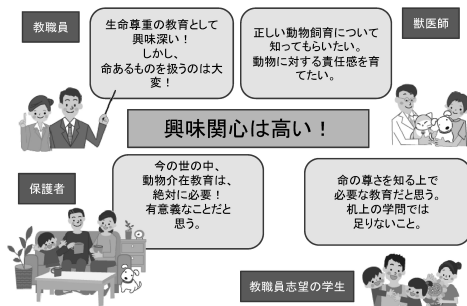
「自分の子どもがアレルギーを持っているため困っている」「休みの日の世話が大変である」等が挙げられた。しかし、保護者は【学校側が十分配慮】してくれているので、いまのところ、大きな困難点とはいえないことも付け加えられた。むしろ、教員によって、動物介在教育の取り組みが違うことが困難点と考えるものもいた。教員や教職志望学生が困難点として考えていたのは、「動物の死や病気についての対応」であった。子どもへの影響を考えての困難点として挙げられた。

保護者からは、困難点の解消のためにも「せっかく近くに獣医学部があるので連携するといい」「愛玩動物飼養管理士などの専門家と連携すればいい」などの考えが捉えられた。

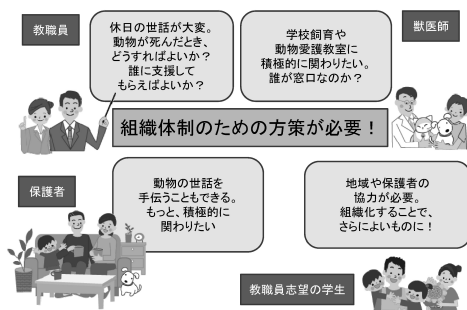
獣医師からは、もっと保育園・幼稚園・学校等と連携したいが、その方法が具体的にわからないことが困難点として出された。また、獣医師の適正飼養に関する活動から、動物飼育について飼う動物のことを知らないまま動物を飼う実態がある」ことが動物飼育について飼う動物のことを知らないまま動物を飼う実態がある」明らかにされた。また、「たとえば動物飼育に関する苦情などの動物に関する問題は、自分は言えないから誰かに介入を頼むなど、動物飼育の問題だけに限られることではない」こと、「地域社会の問題、人間関係の問題である」ことが示唆された。一方、教職志望学生からは、「動物介在教育で学んだことを地域活動につなげたい」という希望が得られた。

資料2 動物介在教育への対象者の考え

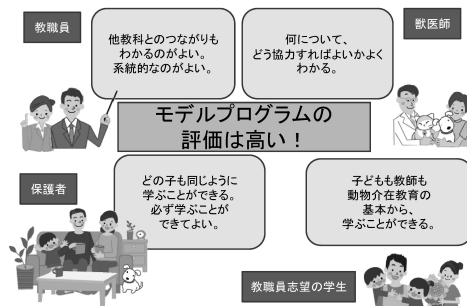
1. 動物介在教育への興味関心



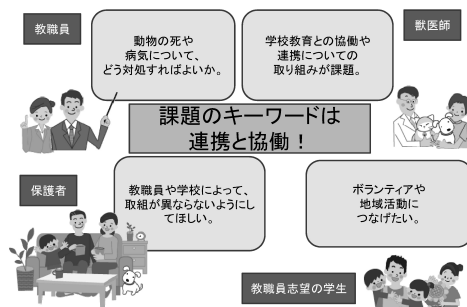
2. 動物介在教育の組織体制



3. モデルプログラムへの評価



4. 動物介在教育の課題



Ⅳ. 考 察

1. 生命尊重のための教育としての動物介在教育（AAE）への期待

保護者も獣医師も教員も教職志望学生も、四者ともに、動物介在教育について【命の尊さ】【責任感】【思いやり】等を醸成する、生命尊重のための「有意義な教育」であるととらえていることがわかった。

命の大切さを知る機会になる」「動物の世話をすることで責任感が身につく」「思いやりの気持ちを育てることになる」という【命の尊さ】【責任感】【思いやり】等を醸成する上で「有意義な教育」であると考えていた。

このことは、新学習指導要領の柱のひとつでもある「自他の生命尊重する心を育てること⁸⁾」のアプローチとして有効であることが考えられた。

動物介在教育の中の「動物飼育」については、「思いやりの気持ちを育てる」「動物をかわいがる気持ちを育てる」「責任感を育てる」「豊かな感受性を育てる」ことが効果として指摘された。この傾向は先行研究^{3) 4) 5)}と同様であり、動物介在教育は「子どもたちが生命の大切さを実感できる。子どもたちに責任感を育成できる。子どもたちに社会性・協調性を育成できる。子どもたちに優しさ、思いやり、忍耐力を育成できる。子どもたちの癒しや人間関係改善の場となる。子どもたちに動物に対する観察力、科学的探究心を育成できる」⁶⁾ことから「意義深いことである。

一方、動物介在教育の中の「動物愛護教室」についても、【命の尊さ】【犬や猫などの飼育方】【責任感】【動物の生態】【動物の触れ方】【動物にはいけないこと】等の理解が深

まり、実践に結びつく【効果の大きい教育方法】であることが捉えられた。また、保護者は「動物愛護教室」に「参加したい」と希望しており、獣医師は「保護者にも動物愛護教室に参加してほしい」「保護者も参加できるような行事での開催をしたい」と考えており、互いのニーズが一致していることが明らかとなった。今後、「保護者が参加することで適正飼育が理解される」ことや「命の大切さを親子で実感できる」ことが期待される。

2. 生命尊重のための動物介在教育 (AAE)

への要望

保護者から動物介在教育に対する要望は、【専門家や関係者との連携】、【保護者との協働】であった。また、教員によって動物介在教育に対する取り組みが異ならないようにしてほしいことが要望として捉えられた。

保護者は動物介在教育の困難点については、【学校側が十分配慮】していることを理解していたが、「動物が死亡した時に困る」「動物が原因で子どもが感染したら困る」「自分の子どもがアレルギーを持っているため困っている」「休みの日の世話が大変である」等が挙げられた。これらは、獣医師等の専門家との連携・協働によって解決できる問題といえよう。

たとえば、「動物の死亡」に関しては、動物のけがや病気に対して、動物の健康を維持し、子どもに健康上の不安を与えないためにも、毎日の清掃、餌を適切に与えるなどの「日常の管理」が重要である¹⁰⁾が、世話をするだけで負えることなく、専門家の協力が不可欠である。

獣医師も専門家として、病気や死への対応に協力的な姿勢を示しており、ともに連携す

る必要が示された。動物の病気や死を困難点として捉えるのではなく、むしろいかに命の教育、心の教育につなげるかが大切であることが考えられた。

保護者からの要望として、学校と獣医師等の専門家との連携が要望として挙げられ、獣医師からは、もっと保育園・幼稚園・学校等と連携したいが、その方法が具体的にわからないことが困難点として出された。東京都の西東京市では、1991年度より「学校における飼育動物の診療と飼育指導に関する事業」を市の獣医師会に委託し、公立学校の動物飼育を支援している¹¹⁾。この支援を受け、国語・理科・体育（保健）・図工・道徳などの教科や総合的な学習の時間に位置づけ、命の教育として十分な成果をあげることが確認された¹³⁾。獣医師らの支援によって、教師は動物飼育が楽になり、保護者も休日の世話に協力的になり、子ども・保護者・教師の動物を庇う気持ちが核になってさらにネットワークが発展する事例¹¹⁾があり、これに学ぶべきであろう。

獣医師の適正飼養に関する活動から、現代の動物に関する問題は、動物飼育の問題だけでなく、「地域社会の問題、人間関係の問題である」ことが示唆されたが、教職志望学生が「動物介在教育での学習を地域活動につなげたい」ことを希望しているように、はこれらの課題解決にもつながる〈有意義な教育〉であることが考えられた。

また、モデルプログラムに対して、学校における動物飼育と教科、動物愛護教室との関連が明確になっていることや、動物愛護教室の展開例が系統的であることが評価された。このことは、動物介在教育の内容や構成、配

列を整理し明示することで、動物介在教育を機能的に推進できることにつながる事が考えられた。保護者が願うように、どの子どもにも公平に動物介在教育の機会が得られること、どの子どもも同じ内容を学ぶ機会が得られることを保障することになる。教員にとっては、教科指導においても、この点を動物介在教育として学ばせればいいことが理解され、授業の中で円滑に取り扱うことができる。獣医師にとっても、何を連携・協力するかがわかることで、支援をしやすくなる。教職志望学生は、特に新任教員であっても何を基本として動物介在教育を展開すればよいかを理解でき、とまどわずに推進することができる。これらのことから、モデルプログラムの提示は生命尊重の教育としての動物介在教育の充実と推進の核といえる。

V. ま と め

本研究では、保護者・獣医師・教員・教職志望学生という動物介在教育にかかわるべき人々を対象とした聞き取り調査から、生命尊重のための動物介在教育（AAE）への要望や期待として、以下の諸点をとらえることができた。

1. 保護者・獣医師・教員・教職志望学生のいずれも、動物介在教育に対する関心が高く、動物介在教育に対する期待も大きかった。保護者も獣医師も、ともに動物介在教育に積極的に関わりたいと考えていることが把握された。
2. 獣医師による保育園・幼稚園・小学校等における動物愛護教室の開催についても、保護者・教員・教職志望学生の興味関心が高かった。獣医師は動物の適正飼養にもつ

ながると考えており、動物愛護教室などを活用し、保護者に対し積極的にアプローチもしたい、保育園・幼稚園や学校の行事の折などを活用したいという要望があった。

また、活発な開催のためにも、愛玩動物飼養管理士などと協働することが必要であることが示された。

3. 四者から、モデルプログラムに関しては高い評価が得られたことから、動物介在教育の内容や配列を明確に示すことが、動物介在教育の推進や充実につながる事が考えられた。
4. 教員も保護者も、動物介在教育を学校の教員のみが行うことの難しさを理解しており、学校と獣医師等の専門家との協力体制の確立や協働が必要であること示唆された。
5. 獣医師の適正飼養に関する活動により、現代の動物に関する問題は、動物飼育の問題だけに限られることなく、地域社会の問題、人間関係の問題であることが示唆された。

今後は、保育園・幼稚園・小学校等と保護者・獣医師などの専門家との協力体制を確立し、子どもの心の教育や生命の教育のための動物介在教育（AAE）を推進することが望まれる。

VI. おわりに

本研究では、動物介在教育に関わるべき獣医師・保護者・教員・教職志望学生を対象とした聞き取り調査から、生命尊重としての動物介在教育（AAE）への期待と要望について把握でき、所期の目的を果たすことができた。

獣医師および保護者の考えから、保育園・

幼稚園・学校等と獣医師等の専門家、保護者との連携・協働が、動物介在教育推進のための要望であり期待であることが把握された。

また、子どもの豊かな心と望ましい態度の育成につながる生命尊重のための動物介在教育(AAE)は、地域社会の問題、人間関係の問題の解決にもつながることであり、積極的に推進することが期待される。

【謝 辞】

お忙しい時期にも関わらず、聞き取り調査にご協力くださいましたみなさまに心から感謝申し上げます。

【付 記】

本研究は、北方圏学術センターの助成を受けて行われた。

【引用参考文献】

- 1) コンパニオンアニマル・リサーチ；人と動物の関係学：http://www.cairc.org/j/relation_index.html
- 2) 太田光明・森裕司：開催報告／IAHAI O 2007 Tokyo, 第11回人と動物の関係に関する国際会議，ヒトと動物の関係学会誌，vol. 20, 2008, pp. 10～15
- 3) 鳩貝太郎代表（2004）：生命尊重の態度育成に関わる生物教材の構成と評価に関する調査研究：平成13～15年度科学研費（基盤研究C）課題番号13680219, p. 5
- 4) 廣瀬由美・増澤 康男：学校飼育を通して児童が学ぶもの—ヒトと動物の多様な関係を認識することの重要性—，ヒトと動物の関係学会誌，vol. 20, 2005, pp. 84～88
- 5) 谷田 創・木場有紀：幼稚園における動物飼育の現状と動物介在教育の可能性，日本獣医師会会報，57, 9, 2004, pp. 543-548
- 6) Glaser, B. G. & Straus, A. L: The discovery of grounded theory. Hawthorne, NY: Aldine de Gruyter, 1967
- 7) B. G. グレイザー・A. L. ストラウス（後藤隆也訳）：データ対話型理論の発見，新潮社，1996, pp3～8
- 8) Glaser, B. G. : The constant comparative method of qualitative analysis, Social Problems, 12, 1965, pp. 436～445
- 9) Glaser, B. G. : Theoretical sensitivity. Mill Valley, CA: Sociology Press, 1978. p. 89
- 10) 鳩貝太郎・中川美穂子：「教職研修合特集 No.157 学校飼育動物と生命尊重の指導」，2003, pp. 74～113
- 11) 中川美穂子：小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて，お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要，4，2007, pp. 53～65
- 12) 鳩貝太郎：第12回学術大会／シンポジウム第1部 動物介在教育(AAE)を考える，子どもの教育における動物の役割，ヒトと動物の関係学会誌，vol. 17, 2006, pp. 35～38
- 13) Letter from CAIRC: <http://www.cairc.org/e/newsletter/2001/0110/html>
- 14) 文部科学省：小学校学習指導要領，1998
- 15) 森裕司，奥野卓司：ヒトと動物の関係学 第3巻 ペットと社会，岩波書店，2008
- 16) 谷田創・木場有紀：第12回学術大会／シンポジウム第1部 動物介在教育(AAE)を考える，動物介在教育の実践～幼児を対象としたAAEを中心として～，ヒトと動物の関係学会誌，vol. 17, 2006, pp. 28～34

- 17) 学校飼育動物：獣医師会と教育委員会との連携事業の成果に関する調査報告抜粋（平成13年3月報告），www.vets.ne.jp/~school/pets/hatogai.html
- 18) 環境省；家庭動物等の飼養及び保管に関する基準．www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2.../nt_h140528_37.pdf
- 19) 吉田太郎：子どもたちの仲間 学校犬バディ 動物介在教育の試み，高文研，2009
動物介在教育の試み Animal Assisted Education，<http://blog.livedoor.jp/schooldog/>
- 20) 動物介在教育（Animal Assisted Education）の試み，Child Resarch Net 子どもは未来である，www2.crn.or.jp/blog/report/01/50.html
- 21) 高山直秀：「子どもと育てる飼育動物—学校での動物飼育ガイド」，メディカル出版，2001

The Problem animal assisted education (AAE) as Education of life respect
Analysis by Interview of Parents, Teachers, Veterinarians,
Students

Yoko IMANO Mituo SATOH Akiko HUNABASHI

ABSTRACT

The animal assisted education is paid to attention as an education that raises child's mind now. In the present study, the realities of the animal assisted education were analyzed from the Interview of Parents, Teachers, Veterinarians and Students. As a result, the following some points were able to be caught.

1. All of Parents and Veterinarians, Teachers, and Students wish student of the concern about "Animal assisted education (AAE)" were high, and the expectation for animal-assisted education was also great.
 2. About the animal humane class in the nursery school, kindergarten, elementary school, etc. by Veterinarians, the interest concern of Parents and Teachers.
 3. About the model program, it was possible that that the contents and arrangement of animal assisted education are shown clearly leads to promotion and fullness of AAE.
 4. Parents, Teachers understand the difficulty of only teachers of a school performing animal assisted education, and need establishment and collaboration of cooperation organization.
 5. The problem about a present-day animal is not restricted only to the problem of animal breeding, and it was suggested by the activity about a brute doctor's proper breeding that they are a problem of a community and a problem of human relations.
- It is hoped to learn to the promotion school, to obtain cooperation with specialized agencies and chances, and to be going to promote the animal assisted education in the future.

Key words : animal assisted education, interview, Veterinarians, Parents, Teachers